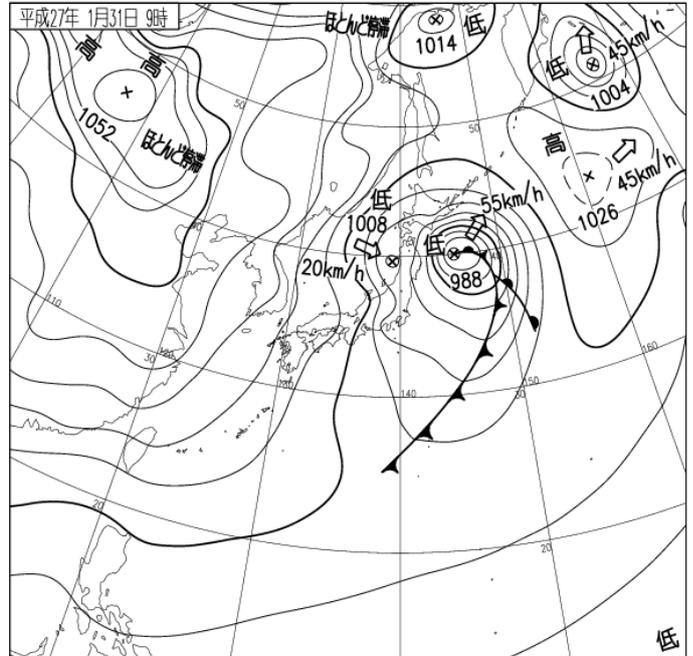
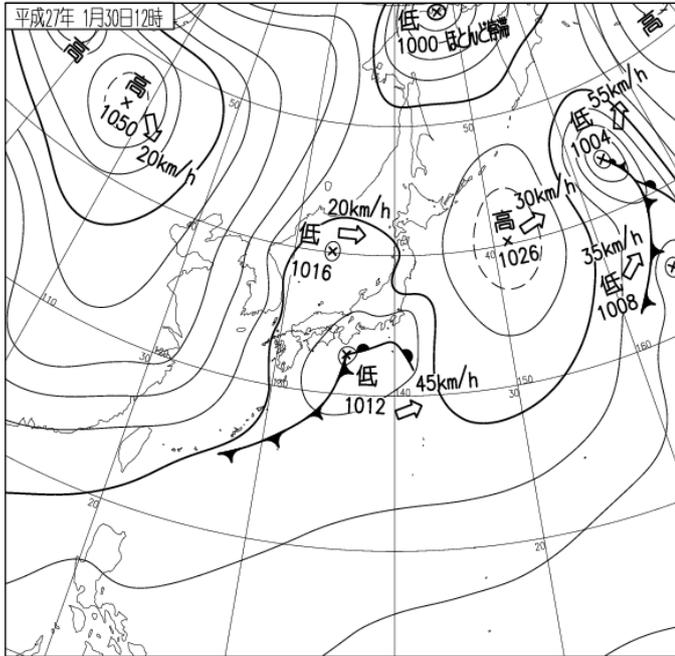


関東地方南部に雪が降る原因は、主として2つです。一つが南岸低気圧です。沖縄県の南海上や台湾近海で発生した低気圧が、列島南岸を発達しながら東進するものです。（かつては「台湾坊主」と呼ばれていました。）東京に降る雪は、圧倒的にこの南岸低気圧が原因です。その後東岸に抜け、急速に中心気圧を下げて発達、東北・北陸・東北海道を悪天候に陥らせることもあります。



「南岸低気圧の発達」 2015, -1, 30~-1, 31 の天気図 (気象庁ホームページより)

もう一つは「房総前線」と呼ばれる局地性前線です。主に冬型の気圧配置の時にできる停滞前線で、名の通り、房総半島から伊豆半島にかけて現れます。規模が小さい局地的な前線なので、小縮尺の天気図には表記されず、あまり存在が知られていません。しかし、この前線が雪雲をつくる範囲に、東京・川崎・横浜などの大都市が含まれるので、時々雪を降らせます。雲海を形成するような雲頂の低い雲なので、大雪になることはまずありません。



この前線が雪雲をつくる範囲に、東京・川崎・横浜などの大都市が含まれるので、時々雪を降らせます。雲海を形成するような雲頂の低い雲なので、大雪になることはまずありません。

「房総前線」の語は、近年ほとんど使われなくなりましたが、今日の天気予報で気象キャスターが珍しくこの語を使いました。冬型の気圧配置の時に、東京湾付近に湾曲した等圧線が見られたら、「房総前線」を疑ってみましょう。